

横浜市政記者、横浜ラジオ・テレビ記者各位

横浜市立大学附属病院

3月20日 外来化学療法室オープン

～患者さんにとっての、より安全で快適ながん治療をめざして～

がん治療において、抗がん剤による化学療法の果たす役割は年々大きくなっており、また昨今の医療技術の進展により、一部の化学療法については外来で通院しながら、安全で副作用を少なくして実施できることが可能となってきています。

横浜市立大学附属病院では、患者さまにより安全で快適な化学療法を受けていただくために、専用の治療室を設け、3月20日から運用を開始いたします。

1 外来化学療法室の施設概要

- (1) 場所: 2階 内科外来となり
(次ページ参照)
- (2) 面積: 約110㎡
- (3) 設備
 - ベッド 5台
 - リクライニングチェア 8台
 - ベッド及びチェアでは、テレビの視聴ができます
 - 診察室 1室
 - 調剤室(安全調剤ユニット あり)
 - トイレ 2室



2 診療体制

専任の医師、看護師、薬剤師が治療、看護、調剤などにあたります。

3 より安全な治療を行うための運用体制

(1) 抗がん剤プロトコル登録制度

抗がん剤の対象疾患、種類、基準投与量、用法等を予め登録し、院内委員会で審査・評価を行う制度です。院内で取り扱う全ての抗がん剤について、委員会で審査・評価した後、プロトコルとして登録を行い、化学療法の標準化を進め、安全性の向上を図ります。

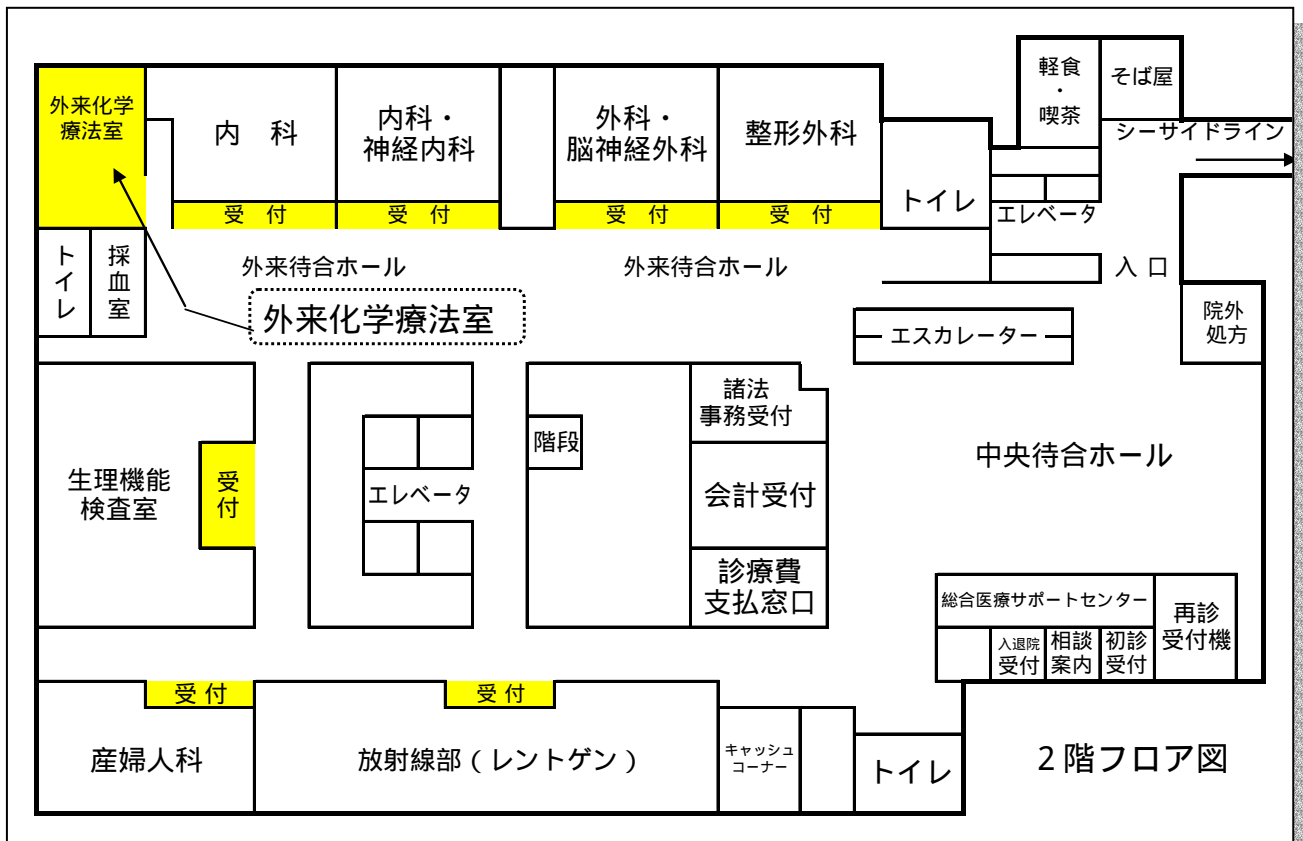
(2) レジメン(治療計画書)制度

登録されたプロトコルに従い、一人一人の患者さんに合わせた治療計画書を作成し、これに基づき化学療法を実施します。医師だけではなく、看護師、薬剤師等と治療に関する情報が共有化でき、より安全性と医療の質の向上が図れます。

4 外来化学療法室の利用にあたって

化学療法室での治療は、完全予約制となります。おかけの科の主治医にご相談ください。

5 案内図



< 参考 > その他の主ながん治療への取り組み

1 高度先進医療（厚生労働大臣が承認した大学病院などで実施される先進性の高い医療）

(1) 「活性化自己リンパ球移入療法」の承認・実施(H16年12月承認)

自分自身のリンパ球を採取し、体外で培養・活性化を行った後に、再び体の中に戻す療法です。この体内に戻されたリンパ球が、がん細胞を攻撃することにより、治療を行おうとするもので、自己のリンパ球を用いるため、副作用は少なく、患者さんの体への負担が少ないという特徴があります。

(2) 「悪性腫瘍の遺伝子診断」の承認・実施(H9年9月承認)

組織・体液等の DNA を分析し、遺伝子の異変を検索することにより、悪性度の強い癌、多発性の癌、転移性の癌についての情報を得ることができ、治療方針の決定に有効な手段となります。

2 前立腺がん密封小線源治療の実施(H16年3月～)

非常に弱い放射線を出す小さな線源を前立腺内に挿入して永久留置することで、前立腺内のがん病巣へ放射線を照射する早期がん治療。放射線を前立腺内に集中照射するため治療効果が大きく、副作用は少なくなります。また、手術に比べ身体への負担も軽く、入院期間も短くなります。

3 強度変調放射線治療(IMRT)の実施(H16年12月～)

コンピュータが計算する治療計画とその計算結果どおりの照射を可能とするコンピュータ制御の特殊照射法により、正常組織を避けて病巣に放射線を集中照射します。前立腺など従来の放射線療法が難しかった部位のがんに、少ない副作用で高い治療効果が期待できます。

4 PET - CT 装置による診断(H17年6月～)

PET-CT 装置とはポジトロン CT（陽電子放射断層撮影）と X 線と CT（X 線断層撮影）を同時に撮影し、画像を重ね合わせることで最新の装置で国内では約 30 施設で導入され稼働しています。PET のがん検出能力に優れた機能画像と CT の空間分析能力に優れた形態画像を同時に撮影し、画像を重ね合わせることで、診断の精度を高める効果があります。また従来の PET に比べて、より短時間の撮影で全身を検査することが可能となります。

5 臨床腫瘍科の創設(H17年4月～)

がん治療には、手術、放射線治療、抗がん剤治療などが有機的に行われることが必要です。同時にがん特有の痛みや、治療に伴う様々な苦痛を取り除くためには、ペインコントロール、栄養、メンタルヘルスケアなどの様々な専門家が有機的に関わる必要があります。

17年4月に創設された臨床腫瘍科・乳腺外科では、効果的な抗がん剤治療を安全に行うと共に、がん治療に必要な専門家との連携を作り、たくさんの医療スタッフが一人のがん患者さんを見守るシステムの構築を進めてまいります。